

舊制松江高等學校教師

カルシウムの足跡を追つて

若松秀俊

◆ 2 ◆

た。当時の日本を深く愛し、日本の人々を慈しみ、自分の持てる知識を惜しみなく生徒に伝えた彼の著述には『カントとハルトマンの比較論述』(日独文化協会、昭和三年)があり、そのほかドイツに関する著述(同協会、同九年)もある。

同僚の高橋敬教教授によるハルトマンの著書の翻訳は、彼の紹介と協力によるものであった。また、長屋喜一元東大教授と『ハルトマン哲学』の著書を残していく。



カルシウムの摂取の大山

日本に強い興味を抱いたのは、一九一一年（明治四四年）年、十八歳の時にドレスデンにおける国際博覧会で「日本」と出合ったことによる。

カルシュは絵画が趣味で、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描いた。彼の描いた街道、湖、嫁ヶ島、袖師ケ浦、大山、山陰の農村、さらには、日本ヨーロッパの文化を伝えながら、同時に自らの人生と絆を結ぶ。彼は松江高等学校で生じた精神生活を磨き上げていった。

昭和十二年、復活祭のにした。期間に英語講師のウッドマンの住む隣家が火の不始末から火災に遭ったが、近所の助力により鎮火した。そのときの印象がますます彼を日本好き制松江高校史の『

日本の宗教や文化に共感

もとに】で、その人柄について、
当時の生徒が語っています。

したが、戦時中のドイツではこの関連学会は禁じられた。

に移住して研究を続いた。

信していた。彼の足跡り
言動を少しずつ確認する
なかで、残り少ない教え
子がいまようやく心丟か

博覧会で「日本」と出合つたことによる。

カルシュは絵画が趣味で、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描いた。彼の描いた街道、湖、嫁ヶ島、袖師ヶ浦、大山、山陰の農村、さらには、日本ヨーロッパの文化を伝えながら、同時に自然に接する人々の精神生活を磨き上げて、彼は松江高等学校で生超える貴重な写真を残してゐる。

昭和十二年、復活祭のにした。期間に英語講師のウッドマンの住む隣家が火の不始末から火災に遭ったが、近所の助力により鎮火した。そのときの印象がますます彼を日本好き制松江高校史の『

は、ドイツ大使オットー
ては、仲介で昭和十五年からの三
『田舎』十年まで国会議事堂近く
、昭和の大天使館に勤務するなど
しまになり、そこで終戦を迎
『や』や曰えた。

味から、高野山で修業の一體験し、著名な哲学者の西田幾多郎や宗教家の谷木大拙らとの親交もあつた。

日本各地を訪問し、彼と親しく過ごす時間を頂いた。この時、彼は出雲社で至聖の神に対面する願いがかなそられ、一本における自らの天命研究に対して神々に感謝の言

う敬慕していられる所を知
り、改めて業績を詳細に
調べる必要性を痛感して
いる。
(東京医科歯科大学大
学院教授)

化の多様性に対する共通の見方や、人間肯定のために垣根を設けず、想像力の世界を自らの精神で描くことの重要性を主張する。人智學的にみた東洋の哲學史の膨大な未刊行稿を残した。現在、米国に住む長女らが整理中である。

究を行へ、次女はマールを述べたという。約一カ月の滞在後、帰国した彼は四十五年に金婚式を祝つたが、翌年、脳腫瘍のために亡くなった。カルシュは少年期に夢見た風景を松江周辺に見ることができたことを、自らの人生の終末期に、周囲の者によく語っていた。

旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追つて

若松 秀俊

◇3◇

渡りに船の松江赴任

住居と庭

(上)



カルシュの住んだ松江市奥谷町の官舎

松江市奥谷町の路地を歩くと、外装の剥はげたごじんまりとした洋館がある。これが大正十四(一九二二)年から昭和十四(一九三九)年までカルシュ一家が住んでいた住居である。大正九年十一月、松江高等学校官制が定められ、翌年五月に起工の運びとなり、十一年五月十八日、同校が設立された。

これに続いてこの住居が新築され、落成したのが「言葉」を五期理乙が同十三年十一月二十九日である。官舎として同

じ形で並んで建った双子ちゃんのこと、生活を律の家であった。最初ほど距離まで正確に把握しないと気が済まないカチカチの先生であったよう

この時期にプラーゲーだ。このあたりは、四期系か理科系に分類した。

さうに外国語の選択によって英語(甲)、ドイツ語(乙)、フランス語

これが頭の中にはいったカルシュは、赴任先を松江に決めた。就職先もなく困窮していたカルシュ夫妻には渡りに船だった、

この地でメヒテルト、ゴットフリート、フリードルンの三人が生まれた。残念ながらゴットフリートは生後一週間で亡くなつたことで、当

したカルシュは、もしかしたらやや遅れて設立された和歌山商業高等学校に赴任することになったかも知れない。友人の長

家で働いていたお手伝い文乙生の柴田牛郎や米田勇次郎らも語っている。合わせにより文甲、文乙、して「九期文乙」のよう

(丙)とした。その組み

が當時の様相と全く異なる。ぜひ修繕して、当校と一緒に紹介してもらいたい。ただし、彼が日本で働く外国人教師の仲介をするようになつたのかが、重要な教科であった。高校によってはフランス語も重要なものであった。高校においてはフランス語も多々の場合に教えたが、多くの場合に外國語といえば英語と云ふ語であった。将来の進学志望先によって文科系か理科系に分類した。さうに外国語の選択によって英語(甲)、ドイツ語(乙)、フランス語

が、當時の様相と全く異なる。ぜひ修繕して、当校と一緒に紹介してもらいたい。ただし、彼が日本で働く外国人教師の仲介をするようになつたのかは分からぬ。とにかく、ラフカディオ・ハーンのことが頭の中にはいったカルシュは、赴任先を松江に決めた。就職先もなく困窮していたカルシュ夫妻には渡りに船だった、

メヒテルトはアランコや砂場でよく遊んだという。庭には藤棚があり、初夏には藤の花が咲き乱れた。それにイチジクやビワの木が植えてあった。妻エンメラにとって庭を整えるのが日課である。

メヒテルトはアランコや砂場でよく遊んだといふ。庭には藤棚があり、初夏には藤の花が咲き乱れた。それにイチジクやビワの木が植えてあった。妻エンメラにとって庭を整えるのが日課である。

カルシュの住んだ官舎

は現存するが、家の内外

は現存するが、家の内外

旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

若松 秀俊

◆4◆

住居と庭

(中)



昭和8、9年ごろのカルシュ夫妻と長女メヒテルト。左の2人はお手伝い

火災時隣人の行動に感嘆

双子の住居のうち、隣の前身)によって報道され、武一郎らが「火事場の馬のウッドマン一家の住んでおり、この地区の人々で運んだことだ家は、昭和十二(一九三七年)、復活祭の期間に火災に遭ったが、近隣に助力により鎮火した。

そのときの人々への印象が、ますますカルシュをしている。

日本好きにしたようである。長女のメヒテルトが後年、何度もいろいろな人に語っている。

出火の原因は、隣人の臭いから、九歳のメヒテルトが最初に発見した。

母が出産間近で用意してこの時、近所の人々が断った。その思い出がメヒテルトが二百人以上追いかけたが、現在老朽化が著しくなことかもしれない。

旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

若松 秀俊

◇4◇

住居と庭

(中)



昭和8、9年ごろのカルシュ夫妻と長女メヒテルト。左の2人はお手伝い

火災時隣人の行動に感嘆

ある。ヤング教授は朝鮮戦争当時、日本に海兵隊として駐留していた。東京のあるパン屋でパンを買った時、支払いのため、ちよつとカウンターに置いた財布を忘れた。このことに気づかず友人と店を出たところ、若い女店員が二百枚以上追いかけ、財布を自分たちの手に戻してくれた。敗戦から間もなく、日本が極めて貧しかったところのことだ。

「日本人とはこんなにも正直な人たちだったのか」と、強烈な印象を受けたという。これが当時のアメリカのヤング教授の大好きな想いである。事実、二人の娘は、そのような施設があれば喜んで手元の資料、写真、絵画などを、松江の市民に寄贈したいといっている。(東京医科歯科大学大院教授)

双子の住居のうち、隣の(前身)によって報道され、武一郎らが「火事場の馬鹿力」で運んだとのことだ。家は、昭和十二(一九三七年)、復活祭の期間に火災に遭ったが、近隣の助力により鎮火した。そのときの人々への印象が、ますますカルシュをしている。

火事は、ものの焦げる臭いから、九歳のメヒテルトが日本好きになったようである。長女のメヒテルトが後年、何度もいろいろな人に語っている。

火事の原因は、隣人の出火。母が出産間近で用意しておいた産着を抱えておろおろしていったという。

母が産着を抱えておろおろしていったとき、彼の娘の自動車のドアがこじ開けられて盗難に遭った。その際、筆者は日本

古き奥谷の文化財とともに、現在老朽化が著しい。何とかこれを修理し、カカルシュ一家が住んでいた当時のたたずまいを復元し、これを記念館としたい。それが筆者の大きな願いである。事実、二人の娘は、そのような

アメリカのヤング教授の家で過ごしたとき、彼の夫婦が日本に研究に従事し、現在は米国ワシントン州

イリノイ州に在住しているヤング元オレゴン健康科学大学教授の話を思い出した。その際、筆者は日本

の治安の様子を彼女から聞かれた。そのときの話

体験であり、彼は今でも

双子の住居のうち、隣の(前身)によって報道され、武一郎らが「火事場の馬鹿力」で運んだとのことだ。家は、昭和十二(一九三七年)、復活祭の期間に火災に遭ったが、近隣の助力により鎮火した。

そのときの人々への印象が、ますますカルシュをしている。

火事は、ものの焦げる臭いから、九歳のメヒテルトが日本好きになったようである。長女のメヒテルトが後年、何度もいろいろな人に語っている。

火事の原因は、隣人の出火。母が出産間近で用意しておいた産着を抱えておろおろしていったという。

母が産着を抱えておろおろしていったとき、彼の娘の自動車のドアがこじ開けられて盗難に遭った。その際、筆者は日本

古き奥谷の文化財とともに、現在老朽化が著しい。何とかこれを修理し、カカルシュ一家が住んでいた当時のたたずまいを復元し、これを記念館としたい。それが筆者の大きな願いである。事実、二人の娘は、そのような

アメリカのヤング教授の家で過ごしたとき、彼の夫婦が日本に研究に従事し、現在は米国ワシントン州

イリノイ州に在住しているヤング元オレゴン健康科学大学教授の話を思い出した。その際、筆者は日本

の治安の様子を彼女から聞かれた。そのときの話

体験であり、彼は今でも

カルシウムの足跡を追って

若松秀俊

5

ここに両親が砂場を作ってくれた。メヒテルトもフリーテルンも砂まみれが大好きだ。見たことのないお城をつくる。絵本でみたお城だ。

ルトにとっては、自分のお城のような場所であつた。今でも何もかも懐かしく想い出される。特に遊び場は父フリツツが愛情こめて愛娘(まなむすめ)に用意したものであつた。

に家屋や庭の見取り図を再現した。不明な点は帰国後に電話とFAXで確かめた。子供の遊び場の砂場やブランコ、それに小さな池は父フリッツの手作りである。家の間取

の夕映えの「家族」の章で、人物を配して次のように再現してみた。

◆ ◆ ◆

家の左側にはフリッツの書斎に面して藤棚があ

「リツツは、砂場の右隣に、ブランコをつくった。休みには、フリーデルンを膝に抱いてブランコを揺らす。左隣には小さな池をセメントで造った。小さな命の金魚、鮎（ふな）を飼つた。

住居と庭

(下)

へ。

「これがきんぎょなの?」
とフリーデルンが訊(き)

□

ここに火鉢があつた

十九

りも庭の様子も再現でき

のきみえきんの部屋。わ
たしはここで寝たわ。こ
こにピアノがあつたの。

メヒテルトの記憶と写
真をもとにして、何度も
図面を書き直した。現在

の様子とはかなり異なる
ようだ。筆者はアメリカ・

チャタヌーガでフリツツの残した写真を調査整理

愛情込めて遊び場手作り

「天気も良いし、表で食事しようか」

「わー、きれいだわ。藤の花」

「これが藤色というのだよ」

「これを髪に挿すときれいだよ」

「これが島だよ」

時々三四の蛙が池の縁で休んでいる。
「ムテイ？」
つかのまの静けさだとときだ。ときどき静寂を破るように、鮎がはねつけてきた。
「バラの赤いバラの赤いバ
「赤いバ
エントラが庭仕事をしのよ。い

、何して
手入れよ
ラね。き
ラは愛の
つかお前

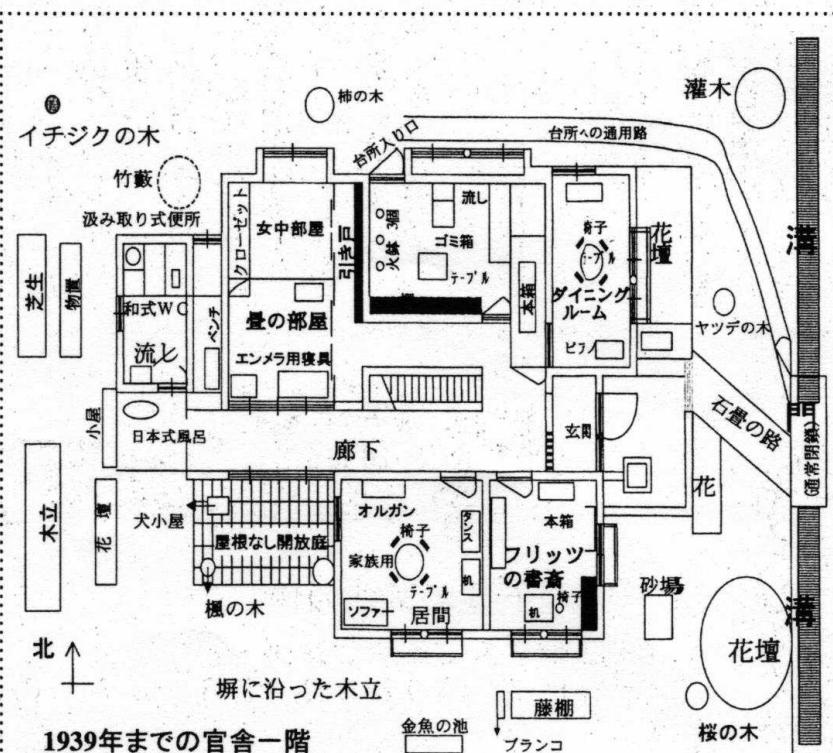
いるの
れいだ

頃に大きな「日本つうじく」でも（東院）

はビワ
くなる
本は、湿
いわね
り、こう
してく

もイチジ
わね」

クも て、が涼 」 大學



1939年までの官舎一階

卷二

カルシウムの足跡を追つて

若松秀俊

7



外国からの客を迎える、学校関係者と一緒に撮影

したカル・シュ父娘と教える
子たちが、宍道湖岸のホ
テルで歓談した際、教科
主任の高畠の紹介でカル
・シュ家で働くようになっ
た西織きみえがエンメラ
について語っている。

ぬくもりや子守歌を今も
なお、記憶している。
おんぶされたときの
歎談する中で、メヒテ
ルトがふと、昭和十四年
当時の帰国間際のことを見
思い出した。昭和十年以
来飼っていた子グマに似
た犬のベールヒエン（子
グマの意味）を、父フリ
ツツの後任のシュヴァル
ベ夫妻に譲つたときのこと
だ。大好きな犬との別
れがとてもつらかった、
という。

どういふわけか長女の
メヒテルトは、あまり家
事の手伝いを母エンメラ
にさせてもらえなかつた
といふ。当時の生活と近
所の様子を、メヒテルト
が筆者に語つてくれた話
に基づいて、次のように

「つまんないの」
「きみえさん、材料をむ
だにしないで
エンメラが注意をうな
べたいわ」

「ムディ（ママ）、寒天
ブッディング、ミルク卵
砂糖入りカスターを食
ら聞いていい。

家庭生活

(下)

がす。石橋の豆腐屋に
メヒテルトはときどきお

家に戻る。中では母の

みえさんにはドイツ風料理を教えてくる。
「わたしもしたいわ」「邪魔になるから、本でも読んでいいしゃい」母はあまり教えてくれ

長女は、やはり母親似

(東京医科歯科大学大
学院教授)

旧制松江高等学校教師

カルシユの足跡を追つて

若松秀俊

◆9◆

ホテル・アム・フリーデン・プラツ



幾重にも重なった偶然

彼女は宗教の街のマーレブルクに在住の、地理学と政治学を専門とするカルシュ博士であることが分かった。松江、横浜、東京、軽井沢での懐かしいかつての暮らしの持ち合わせがなく、旅をかみしめるように語ってくれた。そして話題は、父フリツが一九二五年から三九年まで旧制松江高等学校で教鞭を執っていたことへと、順に進展していく。しかし、残念ながら筆者らの出発の時間も迫

たこととはいっても、出会いには偶然が幾重にも重なっていた。

帰国後、約束の写真をフリーデルンに送ったところ、返事にカルシュ博士の履歴と業績の概略が届いた。戦中、戦後の混乱時に紛れて彼の業績が散逸し、日本では十分に書に自分の住所を書き書類内書についていた葉書に自分の日本名の「ひで」と記した。この一片の書き付けが実際に、調査のすべての出発處のものであった。これ以外にカルシュ博士を知るすべは全くなかった。

フリーデルンから別れ際に手にした紙片に、住所と一緒にメモされた彼女の日本名が、「ひで・とし」と同じ

出会い

(上)

ここで、この物語のもとになった、筆者とカルシュ博士との出会いの奇縁を述べてみたい。

一九九九(平成十二)年の九月五日朝の出来事がすべての始まりであった。おそらく、このことがなかったなら、カルシュ博士のことは人知れず自然消滅していたであろう。高齢の関係者の誰もが口をそろえて後に筆者に語っている。

それは、ドイツ、シュトゥットガルトの小さな工大の高原健爾博士らと一緒に三人で朝食をとっている。そのとき、彼女がふと尋ねると、尋ねると、大部分は忘れそうになつたの

の日本語で語り合つていた。

筆者の方をみてほほ笑ん

だ。気付いてそのわけを

懷かしく感じて、自然に

振り、住所をうかがつて

別れた。そのとき、低解

であつた。後で気がつい

たこととはいえ、出会いには偶然が幾重にも重なっていた。

さて、問題の偶然のそ

の日の朝のこと、仕事の

準備もあって七時ごろで

あっただろうか、階下の

ダイニングルームで室蘭

の日本語で語り合つ

ていた。

そのとき、彼女がふと

尋ねると、尋ねると、

どうなつたの

のである。

た日本語の響きをとどめ、再会を期して写真を

の「ひで・とし」と同じ

所と一緒に入れた彼

女の日本名が、私の名前

学院教授

(東京医科大学大
学院教授)
||文中敬称略||

カルシュの足跡を追う

若松 秀俊

◇10◇



細々と史実確認の作業

フリー・デルンの話に興味をもった私は、松江市役所と島根県庁、島根大学に問い合わせたが、カルシュ博士に関する具体的な情報は全くといっていいほど得られず、筆者も多忙で、彼女とはクリスマスにカードを交換しただけであった。ただ、関連する史実と人名の確認を細々と行っていた。

年が改まり筆者の周辺に種々事情が生じたこと

もあって、その後も十分に時間がとれなかった。しかし、折しも開催されたフランスでの遠隔医療会議に、時間を見てドイツに立ち寄り、会おうとした

いほど得られず、筆者も多忙で、彼女とはクリスマスにカードを交換しただけであった。ただ、関連する史実と人名の確認を細々と行っていた。

出会い

(中)

で筆者に紹介してくれたことがあった。そのなかで国内のカルシュ博士に

縁のあるキーパーソンで

後で分かったことだ

が、一九六八年にカルシ

ュ博士は旧制松江高校同

僚のウッドマンとの

関係が分かった。

ところで同窓生の資料

を探して提供してくれた

のが芦屋在住の白石であ

った。ある集まりで彼が

筆者の話をしたのがきっ

かけで、見も知らない人

から手紙や資料を受け取

ることができた。この白

石がカルシュ博士の調査

と顕彰のひとつとなる

人物である。彼につ

いては後述することにす

ることになった。出

たところ、そこで同博士は長女

以来、彼女がずっと交流

を続けていた数人の住所

を温めていた。彼女をMechtil

d (メヒティル) とよ

く、アルファベットの形

に対応する日本語を調べ、

討するようになつた。現

町の彼の自宅で面会する

竹原敏夫と会ったのはそ

うした中であった。奥谷

学院教授

(東京医科歯科大学大

フリー・デルンと筆者(99年9月5日、シュトゥットガルトのホテル)

ことができたが、当時の

松江高校の同窓会に関し
て全く予備知識のない筆
者には把握できないこと
ばかりであった。カルシ

ュ一家の住んでいた奥谷
町の洋館の前で竹原と写
真を撮った。後になって

関連資料を手に入れ、こ
の洋館に個人的に特別に
興味を持っている人がい
ることや、カルシュ周辺
の同僚のウッドマンとの
関係が分かった。

ところで同窓生の資料
を探して提供してくれた
のが芦屋在住の白石であ
った。ある集まりで彼が
筆者の話をしたのがきっ
かけで、見も知らない人
から手紙や資料を受け取
ることができた。この白
石がカルシュ博士の調査
と顕彰のひとつとなる
人物である。彼につ
いては後述することにす

カルシウムの足跡を追つて

若松 秀俊

◆12◆

生い立ち

(上)

フリツ・カルシュ博士はドイツ・ザクセン王の首都であったドレスデン郊外のグラゼヴィッツで、手広く食肉品を扱うヘルマン・カルシュの長男として、一八九三年に生まれた。グラゼヴィッツ・シラープラツにあるフリツの生家は、その一部が、現在は小さなレストランとなっている。

母はルイーゼ・クニス。二人の姉がいたが、長女のエリザベートは幼少時に亡くなつた。すぐ上の姉が、後にオーストリア不思議」と呼んでいる。

裕福な家庭に生まれ育つ

きりと焼き付いている。後に何度も長女のメヒテルトに語つたという。生まれ育つたフリツ・カルシウムのエリザベートは、近くの王立小学校にいほど良い成績で、日本音楽を聴いたときの感動

のすべてが第一次世界大戦前に書いたものである。十四、五歳までの、

このくだりについては、彼女が初めて見るドイツの街や祖母の印象とともに拙著「湖畔の夕映え」に載せており、そちらを併せ読んでいただきたい。

(東京医科歯科大学大



フリツ自筆の若き日の想い出ノート

は約二十人で、父親の職業が記録されている。工場主などの実業家、大学教授、医師、弁護士、薬剤師、貿易商などで、どの子供もいわゆる裕福な家庭の子弟であることが分かる。

フリツの小学校時代の成績はあまり芳しくない。これは「落第」だ、とマールブルクの自由ヴァルドルフ学校で教師をしていた二女のフリーデルンは、成績表を見て笑いながら語っていた。日本

の通信簿・通信簿に相当するが、父親ヘルマンの確認のサインが見られる。母のルイーゼとのものである。

フリツの残したノートの内容の大部分は、若き日の想い出である。内容はまだざざに調査していいが、おそらくそのすべてが第一次世界大戦前に書いたものであらう。十四、五歳までの、

このくだりについては、彼女が初めて見るドイツの街や祖母の印象とともに拙著「湖畔の夕映え」に載せており、そちらを併せ読んでいただきたい。

る。

ところでフリツが若めに綴っている。彼の心根を知る有力な手がかりとなる記録である。この書に残っている十枚ほどの写真には、一応解説が付いているが、誰の写真か、何のためのものが現在のところ分から

ない。

フリツの母のルイーゼは、自分たちの大きな家が人手に渡ってからは、アパート暮らしであった。父の残した数少ない形見の品の一つでは、アパート暮らしであった。一九三一年に、三歳のメヒテルトは独り暮らしの祖母ルイーゼと共に地で会面している。

このくだりについては、彼女が初めて見るドイツの街や祖母の印象とともに拙著「湖畔の夕映え」に載せており、そちらを併せ読んでいただきたい。

(東京医科歯科大学大

学院教授)

カルシの足跡を追つて

若松 秀俊

◇13◇

裕福な家庭の子供が通学、後に理科系に移った。う王立の小学校を終えたので、大学入学までに他フリツツは、當時として人より長い時間を使つた。

指して上級学校であるギムナジウムに通うことに年報は、卒業資格（アビテュア）認定時の公開テストの案内であり、学校長ベルナー教授博士の名

写真のギムナジウムの学の技術者になろうとし向転換していたし、当時脚光を浴びていた電気工

ジウムは、日本でいえば中学校から高校までに対応する学校である。

生い立ち

(下)

戦争経て哲学に关心移る



プラゼヴィツ職業ギムナジウム年報

一九一四年三月十三日にギムナジウムの卒業発表会が行われたが、フリーで父兄に知らされていていた。ドイツでは故郷ツツは英語での講演を義る。これとは別に、彼の進路が自然科学であることが普通であったことだ。最初は文科系のギムナジウムに入っていた確かな証拠になつた。デジ工科大学に入学し、

関連科目の勉強を開始した。が、世の中が不穏な時期にあって、間もなくサラエボ事件を契機に第一次世界大戦が勃発した。このとき、理由は不明とくフリツツは二十一歳になっていた。最初は文部省に勤務づけられていた。この進路が自然科学であることが普通であったことだ。大都市の有名大学で、大都會であり、松江に赴任する直接受けた縁(ゆかり)の地である。

ここはカルシュとエンメラ、それに後に生涯の友となる長屋喜一との運命的な巡り合いがあった。このためには、當時の学問の中心地であり、最も自由の意を沿つたと考へられた。復員したフリツツは、テクノロジーとされるマールブルクを訪れた。(東京医科歯科大学大

ト・アム・マインの北八〇キに位置する宗教の都市であり、ライン支流ラーン河に沿つて早くから開けた古都である。小高い丘からはもちろん、街なかでもラーン河の静かな流れを見ることができる。中央駅を降りてすぐのエリザベート教会はドイツ最古のゴチック教会で、この地は唯一の宗教聖地となっている。また図書館の豊富な大学町の勉強を中断し、学友らそして、宗教に关心をもとにドイツ帝国の電信隊志願兵として参戦した。この間、戦争の悲惨さを体験し、多くの仲間を失った。復員したフリツツは、テクノロジーとされるマールブルクを訪れた。(東京医科歯科大学大

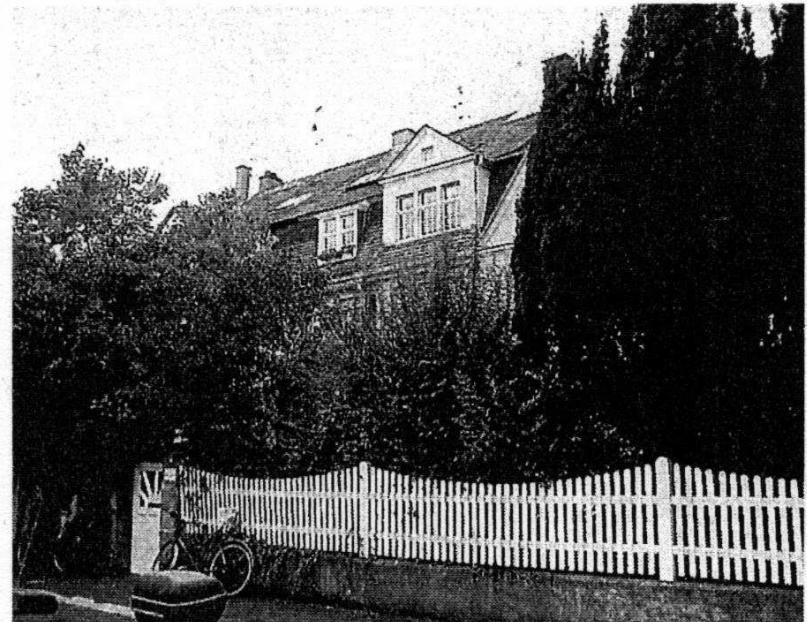
院教授)

〔文中敬称略〕

カルシの足跡を追つて

若松秀俊

◇15◇



カルシュ夫妻が新婚時代に住んだ家

ところで哲学者ハルトマンというと、カルシュの師のニコライ・ハルトマンと、エドアルド・フオン・ハルトマンがいるが、「海の幸」「わだつみのいわこの宮」などで有名で、仮象の世界を生きるエネルギーとした天才画家・青木繁が大きな影響を受けたのは後者からである。

エンメラとの恋愛時代に、シュタイナーの言葉をフリツツが手書きでまとめて贈ったそうである。絵も手書きである。これが長女メヒテルトの手元に残っている。このころすでに、シュタイナーの人智学に彼の関心は傾き、そのような仲間と

マンに師事し、生涯の友
となつた長屋喜一には、
ドイツ語を個人的に教え
たことによつて一層親密
さを増した。

ドイツ語の主語の用法が
いろいろと、かなりかしこ
まっている。小説『湖畔
の夕映え』で描いたほど
に、互いに親しい仲にな
つても終生、姓を用いて

の交流を深めていた。

縁の糸

(下)

呼び合つたと
いう。現在と
はずいぶん異
なる。熱心ではなかつたそ

学への興味からいつて、
学術的な信条・意見の違
いによることが、その原

り合つてからわずかの期間で結婚したという。その住居のある場所はヴァ

は大学卒業後、ニコライ・ハルトマン教授のもとで哲学博士の学位を取得

授として教鞭を執り、退官後はヨーロッパ各地で禅の普及に務めた人であ

なる習慣である。

不満があつたのではある
うが、後に長屋と一緒に
『ハルトマンの哲学』に

因であつたのであろう。
いずれにせよ、当時の就職状況はきわめて劣悪

イセングルガー通り、現在のシュッキング通りである。

した。その証明書を、ドーラー。当時は今と違つてD-U（ドゥ）で呼ぶことはデルンから手に入れた。なく、Sie（ズイ）で呼んでいたといふ。今

れば、当時の社会の事情もあつたろうが、ハルトマン教授はフリツツの就職先の世話には、あまり

ついてわざわざ書を著している。したがって、軽い不満の程度のことか、あるいはフリツツの人智

であり、自分に合った職業を見つけることは容易なことではなかつたはずである。

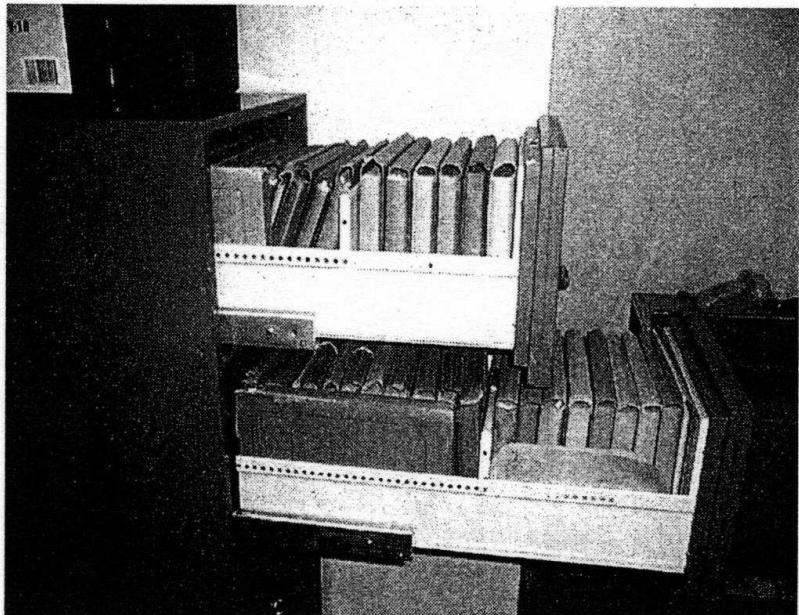
（東京医科大学大
学院教授）

カルシウムの足跡を追つて

若松秀俊

◆17◆

長女メヒテルトの自宅に保存されている一万五千ページにのぼるカルシュの遺稿



るか、を示すと努力した。人が直接知ることのできる肉体的なものから、ひとの知識ではない、しかし接近可能である、形而上学的な「人の信念」に大胆に彼が入り込むことによって、見い出したものが彼の哲学であろう。また、彼の仕事は、シュタイナーの哲学とカント哲学との関連を示すとしたことにも見られる。

フリツィは自らを称して行動的人智学者であり、シュタイナーの「精神科学」を世に広める教師であると言っていた。

二女のフリーデルンはマールブルクの自由ヴァルドルフ(Waldorf)学校に通い、マールブルク大学で政治学と地理学の二つの学位を取得し、同じ自由ヴァルドルフ学校の教員になった。

学とシュタイナーの哲学的洞察法の、いわば一人の「生徒」であった。そして、現在のメヒテルトの主な仕事は、人智學のドイツ語のテキストや文献を英訳することである。

行動的人智學者として

学、および初期のグノーキシス説（Gnosticism）に関しては、ほぼ整理できた。現在、長女メリヘルトが引き続き整理中である。カルシュはルーズリーフの形ですべてを書き綴り、一冊当たり約四百ページのファイルの仕事に追われたこともあって、残念ながら日本に關して十分な學問的つながりを保つことができなかつたようだ。彼は自分が通じていた事項についてまとめる作業をせず、逆におびただしい数

學問と著述

(中)

女メヒテルトが引き続き整理中である。カルシュはルーズリーフの形ですべてを書き綴り、一冊当たり約四百ページのファイルに、逆におびただしい数ながらを保つことができなかつたようだ。彼は自分が通じていた事項についてまとめる作業をせず、文書中に見い出せるものと確信できるし、彼がどうだ。カルシュが禅と西田哲學に大きな興味を抱いていたことを彼の残したものだ。

これから日本の哲学に入つて行つたのかをも明らかにできるはずである。フリツツは自分の仕事の中でも、人の思考がどのようにして今に至つたかを論述し、また学問や内修を通じて、シュタインナーが唱えた新しい思考にいかにして到達できる

のことである。それゆえ、彼は自分の子供たちにも基本的な哲学的思考法を真剣に伝えた。

二〇一九年

全興學

人味之院

教東深教

京授之育

文 実 医 科 の も に

はのぎ科

敏称
函
方志
考

さわ める そと

哈入る。わめ

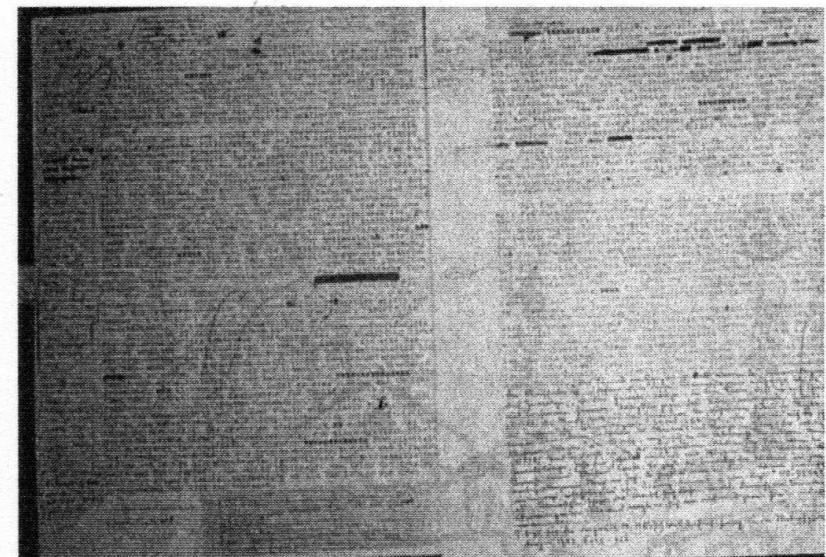
二十一

八

カルシウムの足跡を追って

若松秀俊

18



カルシュの未整理遺稿の一部

したがって、単なる机上の理論ではなく、實際に数多くの優れた教育効果を生み出しており、内
部をとけて現在に至っている。日本ではシユタイナー学校と呼ばれている。

外にその実績が見られること、この理論に心酔してしまったカルシュ夫妻は、できる限り自分たちの二人の活動をアピールする一方で、人間学のアメリカでの中心的存在であり、高

翻訳に勤(いそ)しむメ
ヒテルトが、筆者と父フ
リツツとの縁を、仏教に
歴にあつて今なお、独英
娘に人情学を伝えようと
した。長女はやがてこの
分野の専門家となり、二
女は自由ヴァルドルフ学
校で教鞭を取る。

校で学び 同じ学校で実際の教育に当たり、本年定年を迎えた。シューイー・リュンジ基づく学校の

も通じる言葉でにこやか 先生となることは、この

に語ってくれたことを思
い出す。
つづめて、人間学に基
づいて、ハーバードのラーニ
ング・モデルを用いて、教
育の実践による個人の
精神的深化の一途性について

セナリオは、人間学に基いて、どうして、どうかで、どうかで、づくシユタイナー理論にある。

（東京医科歯科大学大
による教育実践のための学
校は一九一九年に十二年
制の学校としてドイツに
学院教授）
＝文中敬称略＝

二人の娘に人智学伝える

て自身の談話力を擴大を進め、やがて自らの姿し、通常の感覚ではどうと世界とのかかわり合いえられない世界の認識をを認識し、真に自由で自己指すものである。した覺的な参加者となるといつもこの通りだ。

かでその過程に神

卷之三

たの磨^{アラシ}と大絶文^{タカツバ}者^ハ

の時代の元氣

の帰伍は云々ものではな
審

八「思考」—「參業」

一馬系

の基本的活動からなること

○異化白淨重力

卷之三

人智慧では、人は身体、
魂、精神（靈）から成る

學問と著述

下

カルシウムの足跡を追って

若松秀俊

19

| 本篇 | 獨逸ナキソニ | 國ドレスデンノアーバルシ |
|----------------------|----------------------------------|--------------|
| 西脅 十五年正月 十二月三日 | ブラゼウヰツツ實科中學校卒業 | ハムニアラバカルシエ |
| 大曾年正月 十五年正月 | 志願兵トシテ從軍電信隊勤務 | ハムニアラバカルシエ |
| 十五年正月 | 豫備少尉ニ任セラル | |
| 十五年正月 | 軍職ヲ退ノ | |
| 香川正月 十五年正月 | ブランブルタマールブルクノ大學ニ於テ モトシテ哲學ヲ研究ス | |
| 十五年正月 | ブランブルデハブランブルハイルレーベン在籍 | |
| 大正十四年正月四日ヨリ昭和三年三月三十日 | 适松高等學校獨逸語教師トシ | |
| 大正十四年正月四日ヨリ昭和六年五月額四百 | モハク入契始終給俸給月額四百 | |
| 昭和三年四月一日ヨリ昭和六年五月三十日 | 寅拾五圓ヲ給セラル | |
| 昭和六年三月三日 | 适松弘高等學校獨逸語教師トシ | |
| 昭和六年三月三日 | シテ備註契約締結俸給月額 | |
| 昭和六年三月三日 | 四百貳拾五圓ヲ給セラル | |
| 昭和六年三月三日 | 契約期限滿期旨解約 | |
| 昭和六年三月三日 | 适松弘高等學校獨逸語教師トシ | |
| 昭和六年三月三日 | シテ備註契約締結俸給月額 | |
| 昭和六年三月三日 | 四百貳拾五圓ヲ給セラル | |
| 昭和六年三月三日 | 自今委任五等以上三產シ取扱ハル | |
| 昭和六年三月三日 | 契約満期解約歸國 | |
| 昭和六年三月三日 | 文部省 | |

カルシュの職務記録（島根大学所蔵）

る。嵩山は高い山を意味する山だ。それゆえ、松

強い縁で
なった。

結ばれる土地

江高校の生徒には崇高なシンボルであった。当時の学生寮である自習寮の丘からの見晴らしはよく、和久羅山（わくらやま）と藥山（らくざん）とともに、乙女が仰向けに寝た姿に見立てて、昔から寝仮（ねぼとけ）と呼ばれていた。生徒はロマンを託して「メツチエン山」と呼んでい

その周辺の気に入つた。景色や建物を描くために、彼は画紙集とバスカルをもつてよく散歩にかけた。そして、この辺りで、ここに住む人々をしきやがて彼にとって二の故郷となつていった。

との出会いが直接の誘因となつたことは既に述べた。カルシュが長屋にドイツ語を親身になつて教えたことが、生涯の友情に発展して行くきっかけになつた。

にならたといふ。いすれにせよ、松江を選んだのは、何といってもラフカディオ・ハーンへの憧憬

（じょうけい）の潜在意
識であつたろう。

長屋がどういう経緯で和歌山高等商業学校と松江高等学校のドイツ語講師の職をフリツィに紹介することになったかは分からぬが、そのころ、

ハーンへの憧憬から松江に

ハーレンへの憧憬からはじまりた。親身になつて教になつたといふいすれが、生涯の友情にせよ、松江を選んだのは、何といってもラフカニシタ。松江高等商業学校と松山高等学校のドイツ語講義であったろう。ドレスデンの博覧会で日本と出会って以来、持ち続けた異国文化へになったかは分らないが、そのころ、の興味が誘因であつたうつた。松江がどういう経緯で（しょうけい）の潛在意識であったろう。日本と出会って以来、持ち続けた異国文化へになったかは分らないが、そのころ、の興味が誘因であつたうつた。松江の東、中海の近くにそびえる嵩山（だけさん）があつた。松江の東、中海の近くにそびえる嵩山（だけさん）があつた。

ハーレンへの憧憬からはじまりた。

うを
感じ、運動に勉強に励ん
だところで、生徒たちに
とっては高校生活の象徴
でもあった。フリツツに
とっても日本での生徒と
の交わりの象徴となる、

力してくれた同氏に改めて感謝の意を表したい。
(東京医科歯科大学
学院教授)
||文中敬称略

学院教授

文中敬称略

カルシュの足跡を追つて

◇21◇

若松 秀俊

明治以来、文部省の方針に沿って、大学では「お雇い外国人」による専門教育を行ってきた。

この時期には専門教育についても、既に日本国内で再生産された教官により十分に行はれていた。たが、外國語についてはネイティヴを必ず一人雇つてその教育に当たつていた。

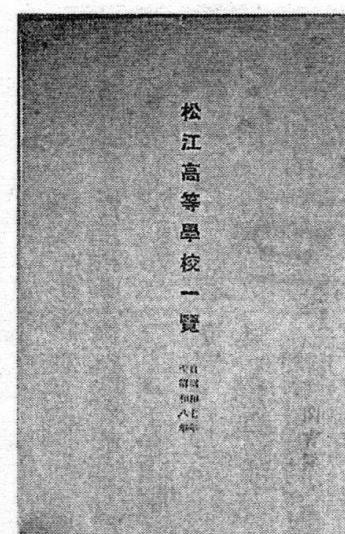
ところが、彼らと日本人の給料には歴然とした違いがあった。大正十四年（一九二五）年十月にフリッツ・カルシュが月額俸給四百二十五円でドイツ語教師として採用され、昭和二年（一九二七）（英國・文學士）、アーネスト・カルシュのみが博士号所有者であった。

年四月、東京帝大出身の松原武夫教授（理学士）は年俸千六百円であつた。税金を考慮せずに単純に見て、カルシュは松

ノイド・ミアーズ（英國・文学士）、エチ・エス・ベッセル（英國）、ウティカー、エチ・エス・ギルソン（英國・文学

松江高等学校

（下）



昭和7年度の松江高等学校一覧

お、カルシュは昭和十五年から終戦まで駐日ドイツ大使館付き副武官として奉職した。

ところで、あまり知らない日本人に著作権の概念を認識させようと努めした、日本における

力した。和歌山高等商業学校で

いわば著作権の父と呼ばれる人である。ショヴァルベは松江高校退

任後、戦後の駐日ドイツ大使館報道官として奉職

し、日独親善に尽力したことが知られている。拙書『湖畔の夕映え』中に

は第一次大戦時の捕虜で「ドクター・シュヴァルベ」とあるのは、当時周辺の人々がそう呼んでいたに、彼からの情報も入った。ちなみに、このシン

・シンチングルとして教鞭を執っていた。ちなみに、このシン

・シンチングルである、四半世紀前からの筆者の友人でもある。

とにかく、カルシュに

・シンチングルであり、四半世紀前からの筆者の友人でもある。

・シンチングルである。

（東京医科大学大

（東京医科大学大

（東京医科大学大

（東京医科大学大

（東京医科大学大

（東京医科大学大

見える。前出の彼についての毛筆で書かれた経歴書とこれらの資料を見て、筆者はカルシュ調査を本格的に行うようになつたわけである。

年四月、東京帝大出身の松原武夫教授（理学士）は年俸千六百円であつた。税金を考慮せずに単純に見て、カルシュは松

ノイド・ミアーズ（英國・文学士）、エチ・エス・ベッセル（英國）、ウティカー、エチ・エス・ギルソン（英國・文学

（英國・文學士）、アーネ

弟の末子として生まれた
フリッツ・カルシュは、
一九七一（昭和四十六）
年十一月十八日にカッセ
ルで没した。

カルシュの祖先につい
ては、祖父ヴィルヘルム
が牧畜業を営み、父ヘル
マンはエッシュドルフで
生まれたことと、母方の
姓がクニスであることし
か分かつていない。詳し
くは彼が残した青春の記
録を解読すれば分かるか

心血を注いでくれた岡崎道夫、遠藤捨雄、宮田正信、白石磷、田島康弘は相次いで他界した。小生が多忙でなければ、面談調査にも奔走できただろうにと思いながら、カルシュと旧生徒との数々の交流を記録にとじめ得なし、このカルシュ顕彰に

つたじゆ、全国紙
め山陰中央新報な
各紙が顕彰進展を
ともに取り上げて
た。そのおかげで
うカルシュについ
合せがあり、拙

忘れ得ぬ「ふるさと」

畔の夕映え出版や旧制松江高校同窓会の支援によるわけである。フリッツは三、四歳の頃、エルベ河でねばねばつながるなど、カルシュフリッツの父ヘルマンに関心を持つ人が増えてきた。このような経緯から、今こうして山陰地方の皆様と紙面を通しておの広場に面する店で大規付き合いをいただいていふわけである。

こう、エルベ河でねばねばつながるなど、カルシュフリッツの父ヘルマンかけた。そのとき名もなき労働者に救われたとのいは、どういった経緯なののかは不明だが、ドレスデン郊外のアラザヴィッツ時には、盲腸から腹膜炎を起こし生命の危機に陥ることである。また九歳のことである。

からいまだしておらずで汚れた建しい様相の人々の話情もあって簡単ではな

に完全に復興され、煤（すす）物は今も痛々しままだ。地元では財政の事、完全復興はいいという。か

い出が詰ま
街を限りな
のである。

得ぬふるせと

ようにもう
デンは、残
次世界大戦

かつたドレス
念ながら第二
で受けた戦禍

こよなく大
フリツツは
れ故郷」で

親類と縁者

(11)

カルシウムの足跡を追って

若松秀俊

◇22◇



ツヴィンガー宮殿よりエルベ河を望む

ことになった。巨大なロシュヴィッツ鉄橋の建設に従事する労働者に食事を用意したり、サンドウイッチを売るなどして大きな利益を上げた。同様にして裕福になった隣人と共同で建てた石造りの大きな建物は現存し、中央先端部には今まで父のニニシャルH・Kが見られる。ヘルマン所有の主要部分は、一九〇一年に彼が肺炎で亡くなつて間もなく人手にわたったという。

彼の長姉エリザベートは乳児の時に死亡したが、次姉フリードルはオーストリアで結婚し、三子の子孫は健在とのことであります。

一九三九年とその翌年に、フリツツの長女メヒテルトは、祖母ルイーゼンはザクセン王国の首都ドレスデンのアパートにて会っている。ドレスデンはエルベ河のほとりの優雅なバロック調の芸術

ついでこのザクセンと並んで、エルンはドイツで最も裕福な王国であったのに、残念なことである。メヒテルトはこれまでの歳月のほとんどを日本と米国で過ごしたので、この芸術の街には格別深い思い出がないようである。しかし、父フリツィーにどうては、両親と何度も訪れたことのあるツヴィングラー宮殿やゼンパー劇場での歌劇や演奏は、生涯忘ることのない思い出であったという。

(東京医
学院教授)

文中敬称略

カルシの足跡を追つて

若松 秀俊

◇26◇

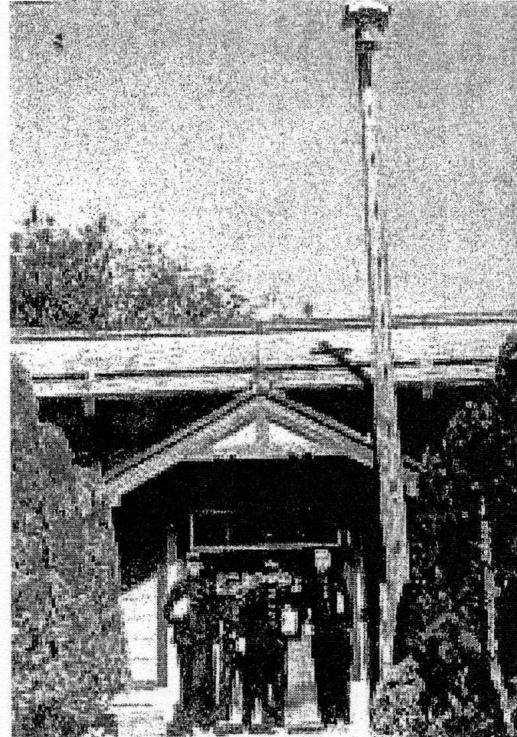
メヒテルトも読んだ「教訓名画集」(上)とお気に入りの人形(下)



カルシュの足跡を追つて

若松 秀俊

◆27◆



自習室(旧制松江高校学寮)

厳格だったプラーゲ先生

(上)

カルシュの着任前後のドイツ語教育について、当時の生徒が語っていた。教える先生の人柄によつて、その印象は全く違つた。興味深い証言である。

カルシュの前任のプラーゲに関しては、厳しい先生という言葉が一様に返ってきた。彼は西洋人としては小柄で、ドイツ語は正確に耳で聞き、そのまま発音しろと言つて返ってきた。彼は西洋人

江高校四期文の米田勇次郎は、そのような記録を残している。

ドイツ語の授業

(上)

は米田と同期生の柴田午郎である。大正の末ごろ、どうした風の吹き回しが突然帰国した。か、ドイツ語という思い

が、政府はこれに十分に取り組まなかった。彼は

日本での著作権の父ともいわれる文科に入学許可になつた。彼は、中学の時に初

た。彼は、當時、外國人教

師から直接外國語を習う

ことは初めてのことだ。う

れしいことでもあった。

ところが、それから一年半あまり経つてその先生が突然帰国した。

か、ドイツ語といふ思

い先生。他方はいつもにこやかで、甘えたいほど

のやさしい大男の先生。

しかし柴田が今でも思

て疑わないようだ。

五期理の鈴木繁徳によれば、當時、外國人教

師から直接外國語を習う

ことは初めてのことだ。う

れしいことでもあった。

それにひきかえプラ

ゲは、小さなチヨークのヒトコゲを箱の底から探し出して、三本指の先に

つまんで字を書く人であつた。

ところが、この二人の先生は

してこいといった「イン

メント」という詩の一編

である。でも、柴田は覚

えて来なかつた。すると

たゞらを思いつき、チヨ

魔帳に記入していた。そんな風だったので生徒の反発を受け、学級全

い証言である。

カルシュの前任のプラ

ーゲに関しては、厳しい

先生という言葉が一様に

返ってきた。彼は西洋人

として、その印象は全く

違つた。興味深い証言である。

カルシュの前任のプラ

ーゲに関しては、厳しい

先生という言葉が一様に

</div

カルシウムの足跡を追って

29

若松秀俊

一九二五（大正十五）年、ブライグは一学期だけ勤めて帰国した。このことはすでに述べた。

二学期の初め、会話の時間に教室でみんなが待っていると、ドイツ語主任の高畠の後ろから背の高い偉丈夫がついて来た。「諸君のドイツ語会話を受け持つドクター・

「カルシユです」とすぐ簡単な紹介して、高畠はすぐに教室を出てしまつた。

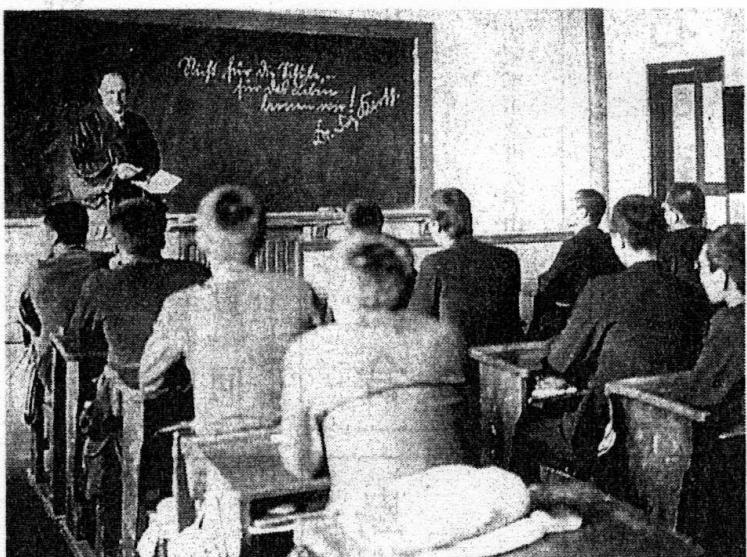
葉はドイツ語だからか
プレーインに猛訓練された
からといつても、一週一
時間の一学期間ではたか
の知れたものだ。一同ち
んぶんかんぶんで、日本
語が分からぬカルシュ
先生は立ち往生の格好に
なってしまった。

会話の授業の成り行き
を心配していたら、先生

もてきた。
いいよいよ分か
らなければ黒板に書けば
いい。こうして先生との
間に会話の道が開かれ
た。

早速ドイツ文が書か
れ、発音から会話の訓練

温厚、



カルシウムの授業風景

た。プラーゲとはまるで違うことに、みんな後になって感嘆した。これは五期理の酒井勝郎の手記から拾った出来事である。

また開業医として長く地元に尽くした坪内謙吉（八期理乙）が、七十年前のカルシュの記憶を二〇〇一年四月二十七日付けの手紙で筆者に語ってくれた。

彼が高校に入学したのは一九二八（昭和三）年であった。ドイツ語を第

温厚、親切なカルシュ先生

ドイツ語の授業

(下)

そうなこの後任の先生が、どんな強行をするのかとみんなで不安に思つていた。でも、話が通じたらいこうにそれらしい気配がない。いやむしろ温厚であって、その親切さでは他の日本の先生に勝るとも劣らない。眞面目で人だった。一時話の時生の田と、口の話し方のところが、みんなの終われ

時間にも満たない
時間だったのに、
怠いやりの深い人、
日本語なしの不利
じゅうとする熱意が
の心に響いた。授
けりには笑顔を見

一 外国語とした者は、その大半が将来は官立大学の医学部か農学部に行く理科乙類の生徒であった。当時、ドイツより爵位を持つグラーフ・チエッペリンが日本にやって来た。カルシュはそのことを非常に誇りに思つて

くれた。
後年、欧洲旅行をして
ライン川にローレライの
岩を見て、坪内はカルシ
ユを懐かしく思い出した
という。

そうなこの後任の先生 面白く
が、どんな強行をするの 人だ
かとみんなで不安に思つ 一時
ていた。でも、話が通じ 話の時
たらいっこうにそれらし 生の思
い気配がない。いやむし と 口

でも際立つてい
た。

一 外国語とした者は、その大半が将来は官立大学の医学部か農学部に行く理科乙類の生徒であつた。当時、ドイツより爵位を持つグラーフ チエヒ

くれた。
後年、欧洲旅行をして
ライン川にローレライの
岩を見て、坪内はカルシ
ュを懐かしく思い出した
という。

くれた。
後年、欧洲旅行をして
ライン川にローレライの
岩を見て、坪内はカルシ
ユを懐かしく思い出した
という。

、 欧州旅行をして
川にローレライの
て、 坪内はカルシ
かしく思い出した
授)
京医科大学大
|| 文中敬称略 ||

— 6 —

カルシュの足跡を追つて

若松 秀俊

◇32◇

富田正信のノートから
は、当時の大学の受験期
の様子も推測できる。
一九三二（昭和七）年の
正月明けから三月初め
にかけては、和文独訳の
連続であった。これはお
そらく教頭でドイツ語主
任の、高畠教授あたりの
要望によるものであった
ろう。近づく帝大受験に
備えての入試問題集によ
つた特訓であった。カル
シュが前年九月に帰任し
たところから、そろそろ始
まっていた。それが十一
月の一ヶ月間の空白をう
けて、年明けとともに急
に厳しくなったものであ
ろう。ストライキによる
授業放棄の後であったか
らである。

富田正信のノートから
題には、ちょっと首をか
い自由作文をドイツ語に
翻訳する宿題を毎週課し
ていた。それを次週の時
にかけては、和文独訳の
いろいろ苦労したことと
思う。もちろん他の同僚
の支えがあったには違い
ないが、それにしても大
変だったと推測される。
授業はまず問題文を生徒

らは生徒それぞれに、短
い自由作文をドイツ語に
翻訳する宿題を毎週課し
ていた。それを次週の時
に伝えていた。それを受け
て、先生も間に試験用紙を配
布し、清書の後に提出させた。
指導の様子とともに、
懐かしい先生の筆跡を今
に見つかった。これはお
くつた文章が少なく、なかつたようだ。先生も
この独訳答案の内容と
1トに残っている紋切型

の方がどれだけ楽しく、
しかもドイツ語が実際に
身についたかしれない。

卒業以来七十余年の空
白ですっかり忘れられて
いたが、たまたま富田正
信のノートに挟み込まれ
て残った答案を見つかつ
た。指導の様子とともに、
懐かしい先生の筆跡を今
に見つかった。これはお

くつた文章が少なく、なかつたようだ。先生も

この独訳答案の内容と

1トに残っている紋切型

1トに残っている紋切型